2019年ワーキング・スタディー・ツアーに参加して

連合　連帯活動局　森　　啓　記

今回のツアーに参加させて頂き、様々な組織からの参加メンバーとともに貴重な経験ができ、語り合うことができたことに、先ずは感謝申し上げます。帰国後、日が増すにつれ率直に思うことは、ラオスのあの子供たちの輝く瞳、笑顔にまた会いたい、サンティパープ高校寮の生徒や卒寮生ともっともっと夢や将来について語り合いたい、そして、いつの日かラオス・タイにおける救援衣類の最終利用先を訪れてみたいということです。

2018年10月に現職を拝命し、ＣＳＡの常任理事を仰せつかりながら、ＣＳＡの歴史や活動内容については勉強途中の不完全な身でのツアー参加でありましたが、これまでの継続した取り組みの意義を現地支援先の皆さんの感謝の声で実感できたことや、救援衣類の輸送や保管に関して現地行政機関との連携の重要性など、今後の課題を認識できたことはとても有意義でした。

連合運動に携わるものとして連合「愛のカンパ」が有効に活用されていることを助成団体であるＣＳＡのツアーを通じて確認できたことは有り難く、また、ＣＳＡの活動が長きにわたり継続されていることに対して、これまで関係された全ての方々、諸団体に改めて敬意を表するところです。

私自身、旅行会社出身であり入社時より業務で、タイをはじめラオス周辺のアジア各国には度々訪問しましたが、ラオスは今回が初めてであり、人々のまじめな気質に数多く触れ、ＣＳＡの活動を通じて行われる教育支援・人材育成が、この国の将来に大きく関与していることを知り、嬉しい気持ちと共に活動を少しでも多くの人たちに周知していくことの重要性を感じました。
首都ビエンチャン中心街をぬけて、しばらくすると現在の日本では想像できない、道路には穴あり、亀裂あり、はたまた未舗装の悪路を走り続けて訪れたトンナミ村小学校・ソムバット小学校。言葉の壁はあるものの子供たちや先生方、村人の皆さんの素朴でありながら心からの歓迎やハニカミながら新聞紙の兜をかぶって嬉しそうな姿、紙飛行機を少しでも遠くに飛ばすために真剣に取り組むキラキラした眼差しを忘れることはできません。一方、校長先生から聞いたラオスの教育現場おいて教員の質を高めることが急務であることや、校舎の更なる補修、新しい井戸の確保などの要望について、あの子供たちが大人になっていく過程とともに国の発展に向けて自助も含めた今後の支援活動のあり方について深く考えさせられました。

サンティパープ高校寮の生徒や卒寮生との交流では、学ぶ機会を得られたＣＳＡの支援に対して心から感謝している姿が私たちに伝わり、胸が熱くなる瞬間が数多くありました。夢を抱き明確な目標に向かって純粋に勉強に励み、優秀な成績を治めたり、すでに社会人として重要な役割を担って頑張っている姿によって、ＣＳＡの支援がラオスの将来に確実に貢献していることを実感することができました。

今回のツアーを通じて、ＣＳＡの活動が連合の取り組みと合わせて、ラオス・タイにおいて大いに役立っていることや感謝されていることを強く実感することができました。「愛のカンパ」が海外で実際に役立っていることも確認することができ、今後の活動に向けて心強く感じ、尽力していきたいと思います。

最後に、ＣＳＡ鈴木事務局長はじめ参加メンバー皆さんのおかげで、無事に全行程を終えることができ、本当に貴重な時間をご一緒できましたことに感謝申し上げるとともに、現地でお会いした全ての皆さまの幸多かれことをお祈り申し上げます。
ありがとうございました。

2019年ワーキング・スタディー・ツアーに参加して

ＵＡゼンセン　カイハラ労働組合　山　本　雅　士

海外はハワイにしか行ったことが無く、パクチーのおおクセに耐えることができるか、日本に妻とこどもの４人を残していくことへの不安感でゲボが出そうなくらい緊張していました。それに漬け込むように、広島空港から羽田空港に着き集合場所のロイヤルパークホテルまでの経路でも迷い、カイハラ労働組合から初参加ということもあり、情報は「5000社の中から選出された」のみでした。こんな自分に務まるのかとマイナス思考で負のスパイラルに陥りかけていました。そして事前説明会が始まり、山崎さんが自己紹介で世界の山ちゃん宣言をして下さり、密かにほっとしておりました。ありがとうございます。

飛行機移動中でも不安は消えずソムサバット小学校への訪問が始まりました。しかし、子どもたちの笑顔や交流をしていくうちに心地良さが芽生えていました。イースンサーンでの写真撮影は初対面なのにこんなに信じてくれるのかという驚きと同時に忘れてはいけないものが見え、この子たちの思いを大切にしたいなという気持ちでいっぱいでした。

続いて片道260Km悪路をハラハラしながら移動し、トンナミ村小学校到着と同時に大歓迎の儀式を行って頂きました。ここでは熱心な校長先生のパワーポイントの説明は子どもたちのために深く理解してもらおうという思いだったのかと感じています。また、先生の能力アップということもしきりにおっしゃっておられましたので、何かを生み出せる能力・気づける能力・挑戦する気持ちなどを教育方針として掲げボトムアップができる体制づくりを日本側から今後はアプローチする必要性を感じました。先生方との食事ではセープッなどの言葉を教えて頂いたことでワーキング・スタディー・ツアーに挑戦する勇気をもらい原点にできました。ホテルへの帰り道（悪路）では夕日と子どもたちとの写真を見ながら来てよかったと思っていました。

続いてサンティパープ高校生ＯＢ・ＯＧとの交流では自分の語学力の無さに反省し、次の日の高校生寮でも学力の高さに期待が持てました。私自身も負けているわけにはいかないと刺激をもらうよいきっかけになったと思います。将来ラオスを背負う人になった時にはあの時の日本人が印象残っていただけていると嬉しいです。

今回のＷＳＴに参加させていただいて感じた私にできる事ですが、やはり生身で感じた必死さや普通に暮らせる事の幸せを単組内で共有することで興味をもってもらうことがステップ１かなと思います。うまく説明できませんが、一人ひとりができる事をつなげていく感覚が重要なのか

なと思っております。
　最後に鈴木事務局長をはじめ森団長・堀田副団長にはチームをうまくまとめて下さり、また準備などこのワーキング・スタディー・ツアーを支えていただきました浅山様も含めまして、大変感謝しております。ご帯同頂きましたメンバーの方も無知な私を快く受け入れて下さりありがとうございました。普段できない経験とこのツアーでできた縁を大切にしていきたいと思います。
コイスー ヤマモト コプチャイライライ。

2019年ワーキング・スタディー・ツアーに参加して

UAゼンセン　オールサンデーユニオン　伊津田　秀美

　はじめに、今回このような貴重な経験をさせていただき、ＣＳＡ事務局の皆様はじめ関係者の皆様、この機会を下さったＵＡゼンセン、組合員の皆様に感謝いたします。
　毎年単組で「救援衣類を送る運動」を取り組んでおり、2018年は62箱送っています。私個人としても親戚にも声をかけ、今年は例年以上に衣類を送った年でしたが、まさかその衣類の送り先に行くことが出来るとは思っておらず、ワーキング・スタディ・ツアーの話を頂いたときは驚きました。このツアーが始まるまでは、約１週間という長い海外出張と、メンバーで女性が自分ひとりであるという事に不安を抱いていましたが、振り返ってみるとあっという間の１週間でした。

　このツアーで一番印象に残ったことは、単組で送った衣類を実際にタイの衣類倉庫で発見出来た事、そしてその衣類が現地で必要とされており、私たちの活動がいかに感謝されているかを知る事ができたことです。衣類倉庫では私たちが送った衣類をさらに細かく仕分けている様子も見る事が出来ました。
　次に印象に残ったことはやはり、小学校で会った子供たちと、サンティパープ高校生寮の高校生と卒寮生たちとの交流です。小学校では盛大に歓迎して頂き、両手に抱えきれないほどの花束をいただきました。そして言葉は通じていなくても身振り手振りで教えた紙ひこうきを一生懸命真似して折り、楽しそうに飛ばしていた姿は心が洗われました。まさか小学校でお酒が出るとは思いもしませんでしたが、ラオ・ハイという現地の醸造酒を頂き、もち米や蒸し鶏などの料理とビアラオ（ラオスビール）を準備していただき、先生方とも交流出来ました。
　サンティパープ高校生寮の卒寮生は、外務省で働いている方や教師など優秀な方ばかりで、優秀であっても家庭環境や貧困などが原因で高校に通えない人たちのためにＣＳＡが学生寮を寄贈し、その学生寮から国を背負って立つ人たちがたくさん出ていることは本当にすごい事だと思いましたし、とても重要な活動をしていると実感する事が出来ました。

　鈴木事務局長はじめともに過ごしたメンバーのみなさん、１週間という短い期間ではありましたが本当にありがとうございました。今回のツアーで学んだことを多くの仲間に伝え、今後も活動を広げていきたいと思います。

2019年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

ＵＡゼンセン　大阪ガス労働組合　山　崎　誠　也

このＷＳＴ参加が決まったときに、楽しさ半分、不安半分といった感じでした。何が不安かというと初海外だったことと、職場を１週間空けるということでした。しかし、その不安も出発したころにはもう無くなっていました。初海外の不安は今回のメンバーのみんながみんな、仕事柄、海外によく行っているとの話が聞けたからです。話しやすい人ばかりで、助かりました。職場のことも、上司や周りの同僚が気持ちよく送り出してくれたので、いい環境で仕事させてもらえてたんや～と初めて思いました。

ビエンチャンに着いてまず驚いたのは、バイクがノーヘルメットで走りまわっていることでした。原付バイクは免許がいらないとのことでした。子どもが普通に運転しているので、マジか～？！と思いました。車、バイクはほぼ日本製のもので誇らしい気持ちになりました。あとは食事でパクチーが存分に効いたものがほとんどで、最初の食事のときは今後が心配になりましたが、次の日にはもう慣れていました。

ＷＳＴの本格的な活動が始まり、初めの村の小学校訪問の際は緊張もありましたが、私が思っていたほど言葉の壁は無く、生徒たちも本当に歓迎してくれているんだということを感じました。２校目のトンナミ村小学校は生徒数も多く、ちょっと恥ずかしくなるくらい盛大に出迎えてくれて、学校の先生の歓迎の懇親会も賑やかなものだったことを今も覚えています。学校への行き帰りの道路の舗装が悪く、車が何度もジャンプしたことは今となっては忘れられない思い出ですが、もう少し道路にも力をいれないとホントに危ないです。本当に。

ラオスでは教育省や保健省の人から話を聞きましたが、なかなか国として教育の現場の発展、観光や水力発電以外の事業の発展、雇用の発展についても見いだせていないといった印象がありました。まだしばらくは支援が必要な状況であるのかなと思います。ですが、夕食の際に佐古商店で今の職業やこれからの思いを語ってくれた、ＣＳＡが寮の支援をしているサンディパープ高校の優秀な卒業生たちは、本当に人当りもよく、とんでもなく賢そうな人ばかりだったし、この国をいい方向に導いてくれるのではないかと感じました。

最後に、今回のＷＳＴで感じたことを周りに伝達すること、今後の中古衣類カンパに全力を注ぐことをお約束しまして、ご報告と致します。ありがとうございました！

2019年ワーキング・スタディー・ツアーに参加して

ＪＡＭ　ものづくり産業労組　本　岡　諒　一

先ず始めに、ＣＳＡの運営事務局と関係者の皆様、そしてツアーの参加をさせて頂く機会をくださったＪＡＭをはじめとする構成組合並びに組合員の皆様に心より感謝申し上げます。加えて、森団長、堀田副団長とメンバーの皆様、本当にお疲れ様でした。

ＪＡＭはＣＳＡの活動に対し、最初は北関東を中心に中古衣類の支援を始め、現在全国へ広めるよう展開をしています。私が在籍している地方は中古衣類を集め送る活動は正直していません。加えて、ツアーに参加するまでＣＳＡの支援活動を殆ど理解していませんでした。しかし、今回このようなツアーに参加させていただき、ＣＳＡの支援活動がタイやラオスにどれほど良い影響を与えているのかがよく分かりました。

主な支援活動である、①中古衣類の送付、②学校建設と補修、③高校生寮支援の３つについて、今回視察をさせていただきました。その他にも、タイとラオス両国の日本大使館を訪問し、両国の特徴や現在おかれている状況や、労働実態などの情報を聞くこともできました。７泊８日の中で特に印象に残っていることを以下にまとめます。

一つ目は「学生との交流」です。

連合愛のカンパ募金を使い建設された小学校と高校生寮支援活動では、小学校２校と高校生寮を訪問し、高校生寮の卒業生と交流しました。

ラオスの小学生達の笑顔が本当に輝いていました。日本から持参した新聞紙を折った兜を頭の上に被せてあげると、恥ずかしそうに照れていましたが、すぐに満面の笑みをうかべとても嬉しそうでした。そして、生徒と一緒に折り紙で紙飛行機を折り、校庭で一斉に飛ばした時も、最初はうまく飛ばせなかったが、すぐにコツを掴み、皆遠くに飛ばすことができとても楽しそうでした。

高校生寮では熱烈な歓迎を受け、ＣＳＡ活動の浸透度を知ることができました。一緒にラオスの歌に合わせて踊りを踊ったり、参加メンバーの年齢当てクイズをしたりし、あっという間に時間が過ぎました。寮の中は４人１部屋で生活しながら勉学に励んでいるそうで、生徒は非常に優秀な生徒が多く、数学や科学などで、成績がラオス国内でトップを取ったりしているそうで驚きました。また、その高校生寮を卒業した方々ともお会いする機会があり、夕刻日本料理レストランで約30名が集合してくれました。大学に進学した方もいれば、就職をした方の多くが医者や省庁職員、教師などとやはり有能な職業に就いて頑張っていることも知りました。私の席の近くにいた卒寮生の一人が大学生で日本語も勉強しているようで、カタコトだが日本語で会話をしました。やはり、日本が積極的に支援をしているので、日本に興味を持っている人も多くいるとの話も聞き、これから更に密接な関係になっていくと思いました。

二つ目は、ＣＳＡの活動の中でも大きな支援である「中古衣類送付」です。
冒頭述べた通り、私が普段従事している地方ではこの取り組みをおこなっていません。ＪＡＭ本部からこのツアーの参加要請があり、他地方ではこの活動をされていることを聞きました。そして、是非とも今回参加をして、この活動を知って広めて欲しいという強い要望がありました。
そして、実際現地へ行ってみて非常に喜ばれていることを知り、色々考えさせられました。今回はタイとラオスの衣類倉庫を訪問し、引渡し式に出席させていただきました。日本各地から集められた衣類をコンテナ船に積み込み、海上で、まずタイに渡るとのことでした。そこから、ラオスにも運ばれ高校生寮にも寄贈していました。また、両国の倉庫に常時保管し、自然災害が発生したり、地方の貧しい地域へ衣類を送っていることを知りました。

中でも１月23日、印象的な体験をさせていただきました。それは、日本では絶対有り得ないことですが、ラオスから車で約２時間程走り、着いたのがタイとの国境でした。車から降り陸の上を歩いて出国手続きを済ませ、また車に乗車し少し走らせて再度下車をして入国をするという不思議な体験をしました。因みに、ラオスの車は左ハンドルの右車線走行で、タイは右ハンドルの左車線走行です。従って、タイに入国し少し車を走らせると走行車線が右から左に切り替わる箇所が設けられていました。なるほどな！と感激しました。

本題の衣類支援ですが、タイのウドンタニへ入り、貧困者保護センターに行きました。そのセンターの玄関入口に引渡し式の会場が設営されており、新聞記者やカメラマンが待機していました。日本から無事届いた中古衣類をタイの福祉開発福祉省の省長へ衣類の入った段ボール箱を渡しました。その会場席には、ウンドタニ村の村長を始め、近隣村の村長達も多く駆けつけ式典をお祝いしてくださいました。それだけ、ＣＳＡの活動の認知度が高いことが伺えました。また、倉庫へ行くと日本から届いた大小様々な段ボール箱が大きな倉庫に山積みされていました。その中には、日本人の個人でＣＳＡ活動に参加している方を始め、他産別、各労組の名前の入った段ボール箱もたくさん保管されていました。私は山積みの段ボール箱の中にＪＡＭのステッカーが貼ってある段ボール箱を見つけることができました。倉庫の管理者との意見交換をさせていただく機会もあり、輸送に関わる問題点や、倉庫管理方法と不足している衣類の種類など色々と情報交換もしました。この活動は非常にいいなと思いました。現地の方々は本当に喜んでいたし、役に立っていることがとても理解できました。

最後に、ＣＳＡの活動を肌で感じ、タイとラオスにとても貢献していることを知りました。この活動で子ども達の素敵な笑顔を生み出していることも体感させていただきました。この経験を無駄にしないよう、これからＪＡＭの仲間にも広く伝えていくと共に、より活動を強化していきたいと思いました。また、産別の枠を超え素晴らしい仲間に出会えたことに心から感謝をし、これからも共に頑張って参りましょう！ありがとうございました！

2019年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

基幹労連　三菱重工グループ労働組合連合会　エ　藤　健　弘

ワーキング・スタディ・ツアーに参加させていただき、数多くの大変貴重な経験をさせていただきましたことを、関係者の皆様と現地で受け入れて下さった皆様に心から感謝申し上げます。

これまで自労組で行ってきたＣＳＡの支援活動としては「救援衣類を送る運動」のみでありましたが、今回実際にラオスとタイに赴くことによって、自労組が取り組んできた支援活動が現地でいかに役に立っているのかを知るとともに、救援衣類に留まらず、小学校建設・補修や高校生寮支援など幅広い活動が行われており、そのいずれの活動も現地の方々にとって非常に有益なものであり、感謝されているということも知ることができました。

今回のツアーの中で小学校を２校訪問しましたが、まず、12ｋｍ離れたところから小学校に通っている児童もいるということであり、常に居住地の近くに学校がある日本との違いに驚きました。そして、校舎も見学させていただきましたが、決して設備的にも恵まれているとはいえない教育環境の中でも勉学に励んでいる様子が垣間見えました。また、教室では新聞紙の兜をはにかみながらも喜んでかぶり、折り紙の飛行機を作るときに言葉が全く通じずとも自分の折り方をじっと眺めながら真似をし、作り上げた飛行機を校庭で投げて満開の笑顔で楽しんでいる様子は非常に印象に残った一コマとなりました。

また、サンティパープ高校生寮を訪問し、ＣＳＡが建設し、運営している寮を見学させていただきました。寮の関係者や県教育省の方々の話から、ラオスのほかの地方にも是非参考してもらいたい言われるくらい寮の存在が優秀な学生の育成に非常に重要な役割を果たしていることがわかりました。さらに、今回、卒寮生とも交流することができましたが、彼らの自己紹介時の現況報告を聴いていると実に前途有望な方々が多くいるなと思いました。サンティパープ高校生寮から、これからも多くの寮生が卒寮生の後を追って巣立ち、ラオスや世界で活躍してほしいと思いました。

救援衣類については、タイ・ラオス両国で輸送状況を確認しましたが、特にタイのウドンタニでの引き渡し式と関係者の話が非常に印象に残りました。タイは東南アジアの中でも経済規模の大きい国でありますが、やはりバンコクなどの都市中心の経済であり、地方になると、まだまだ救援物資が必要な方々が多くおり、タイ社会開発福祉省からも継続的な支援に対する感謝の言葉をいただきました。引き渡し式で多くの村に衣類が引き渡され大事に抱えて戻っていく様子を見て、タイというイメージだけでは理解できない実態を見ることができたと思いました。

また、ラオスの衣類倉庫で自労組から送った救援衣類を見つけた時は妙にうれしくなるとともに、一つでも多くの救援衣類がラオスで役に立ってほしいと願いました。

今回のワーキング・スタディ・ツアー体経験して学んだことを、自分自身の言葉で様々な場面を通じて一人でも多くの仲間に伝えて理解を広め、より力強い活動の継続に結び付けていけるように尽力していきたいと思います。

2019年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

基幹労連　ＩＨＩ労働組合連合会　　堀　田　真　吾

ワーキング・スタディ・ツアーに参加し、大変貴重な経験をさせていただきましたこと、まずは組合員の皆さまと基幹労連の皆さま、また企画運営いただいた事務局の皆さまに心より感謝申し上げます。

これまで「救援衣類を送る活動」「カンパ金の協力」等ＣＳＡ活動について、労働組合の役員として推進してきましたが、実際に自分がこのツアーに参加させていただいたことで、「学校建設・補修支援」「遠隔地の高校生支援」など幅広い活動を展開していること、またこの活動が現地の方々に心から感謝されていることを改めて認識することができました。

特に印象に残っているのは、ソムサバット村小学校、トンナミ村小学校の子供たちのキラキラした目と無邪気な笑顔です。私たちの訪問をとても楽しみにしており、満面の笑みで「サバーイ・ディー」と教室に迎えいれてくれた時は、とても幸せな気持ちとなり、自然と笑顔になりました。また、言葉は全く通じませんが、身振り手振りの説明でつくった折紙飛行機を校庭で飛ばしたり、日本から持参した新聞紙でつくった兜を被せてあげたり等、本当に心温まる交流をさせていただき、癒されました。また、先生方にも熱烈な歓迎をしていただき、日本では考えられませんが、校庭にテーブルを並べ、ラオ・ラーオがふるまわれ、現地の料理を食べながら片言のラオス語で交流する等、ラオスの方々のやさしさに触れることもできました。しかし、小学校に到着するまでの道のりは決して楽なものではなく、一応舗装はされているものの、ところどころアスファルトが剥がれており、その度に猛スピードで走っていた車が急に減速し、すさまじい縦揺れと横揺れに襲われました。忘れることのできない印象に残るドライブであったとともに、インフラ整備の必要性を痛感しました。

もう一つ印象的だったのは、サンティパープ高校生寮の寮生や卒寮生との交流です。家庭の問題や貧困のため学ぶことを諦めていた子供たちが、寮があることで学ぶ機会を得て、将来の夢や目標に向かって勉学をしていることに感銘を受けました。実際に彼らはとても真面目な性格で成績も優秀であり、本当にすばらしい学生達ばかりでした。また、卒寮生も、外務省勤務の方や医学の道に進んだ方等が多くいることに驚かされ、ＣＳＡの支援活動が将来のラオスを担う人材を育てていることを痛感しました。また、「バーシーセレモニー」で、生徒一人ひとりが我々の健康を祈りながら手首に紐を巻いてくれた時には、感動を覚えるとともに、ＣＳＡの支援に対する感謝の気持ちを強く感じることができました。

「救援衣類を送る活動」では、ラオス保健省、タイ社会開発福祉省の方との意見交換で、男性用のズボンが不足しているとの要望も直接確認することができたので、今後の単組での取り組み時には職場への周知をしていきたいと思います。

最後になりますが、今回ＣＳＡワーキング・スタディ・ツアーに参加したことで、これまでのＣＳＡの各種活動の素晴らしさ、活動継続の重要性について改めて認識することができました。また、一緒に参加したメンバーや通訳のフンペンさん、第１期卒寮生のヌーソン君との出会いはかけがいのないものになりましたし、ラオスという国が身近に感じられるようになりました。今後は、私がこのワーキング・スタディ・ツアーで経験したことを組合員に伝えるとともに、募金活動、救援衣類活動など身近にできる活動が、ラオスに暮らす子供たちの未来を支えることにもつながることから、今まで以上に積極的に取り組んでいきたいと思います。

本当にありがとうございました。

トンナミ村小学校で

ナオブッタ保健省長官と

卒寮生と交流

高校生寮で

編　集　後　記

アジア連帯委員会（ＣＳＡ）鈴木　隆

2019年ワーキング・スタディ・ツアーは、参加頂いた７名の皆様の積極的なご協力と関係する方々のご支援により、成功裏に終えることができました。心より感謝申し上げます。

私自身も多くの貴重な体験と新たな発見、そして団員の皆様はもとより、現地でのすばらしい方々との出会いの機会を得ることができ、ＣＳＡを支援して下さっている連合、連合構成組織と組合員、支援組織と支援者の皆様に重ねて厚くお礼申し上げます。今回のツアーで学んだ事、また本報告書を編集する中で感じた感想を述べ編集後記とします。

１．ラオスの小学校を訪問して

ＣＳＡは、その前進である「インドシナ難民共済委員会」が1981年に設立されました。その後、時代の変化に対応し、1996年に将来の活動を展望し、アジア諸国との連帯を意識して「アジア連帯委員会」と名称を変え、アジアの開発途上国の人々と連帯し、共生・共栄を目指す運動を進め、現在に至っています。

本年訪問した２つの小学校も、キラキラした眼差の生徒たちによる歓迎を受けた時、ラオスへの小学校建設の支援をＣＳＡが開始した当時の目的のひとつが「小学校建設によりラオスの識字率の向上に寄与する」ため、とＣＳＡの先輩から聞いたことを思い出しました。どこの国でも初等教育の重要性とまだまだ不十分な環境の中で健気に勉強に励む子供たちのために、私たちは少しずつの前進を続けることと、さまざまなルートとツールを駆使して情報を提供する必要があると改めて思いました。

２．タイ・ウドンタニでの救援衣類引き渡し式

ＣＳＡのメンバーが乗ったマイクロバスが、ラオスからメコン川架かる橋を渡り国境を越えると、ほどなくタイの北部に位置するウドンタニ支援センターに到着しました。私たちを出迎えてくれたのは、支援センターの責任者や関係者の方々と、意外にも現地報道陣の姿がありました。そしてＣＳＡの支援団体からお送り頂いた救援衣類は、この地まで運ばれていました。

引き渡し式はＣＳＡのロゴが入った横断幕が設置され、支援を受けた人々も集まってくれていた事は印象的でした。私はこの式典に救援衣類を貧しい村人に実際に配布する村長さんが多く参加してくれている事を聞き、大変嬉しくなったと同時に多くの支援者にこのことも伝えようと思いました。

最後に、今回の訪問先で共通して思ったことは、支援を求めている方々への支援活動を、労働運動の今日的な活動として、また、社会貢献の裾野を広げるための「共感の醸成」を着実に実践せねばと思いました。

この運動を積み上げてきた先輩諸氏に対し、改めて深甚の敬意とともに、運動の継続の大切さ「継続は力なり」を痛感しました。ＣＳＡからの支援に対する感謝の声の数々が、支援している方々に大きな励みと力の源泉になっていると思います。

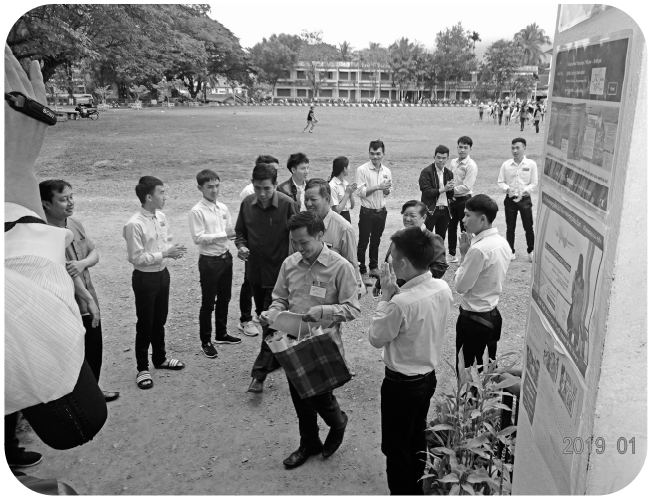
以上

トンナミ村小学校校舎前で

ビエンチャン初日

タイ衣類引渡し式

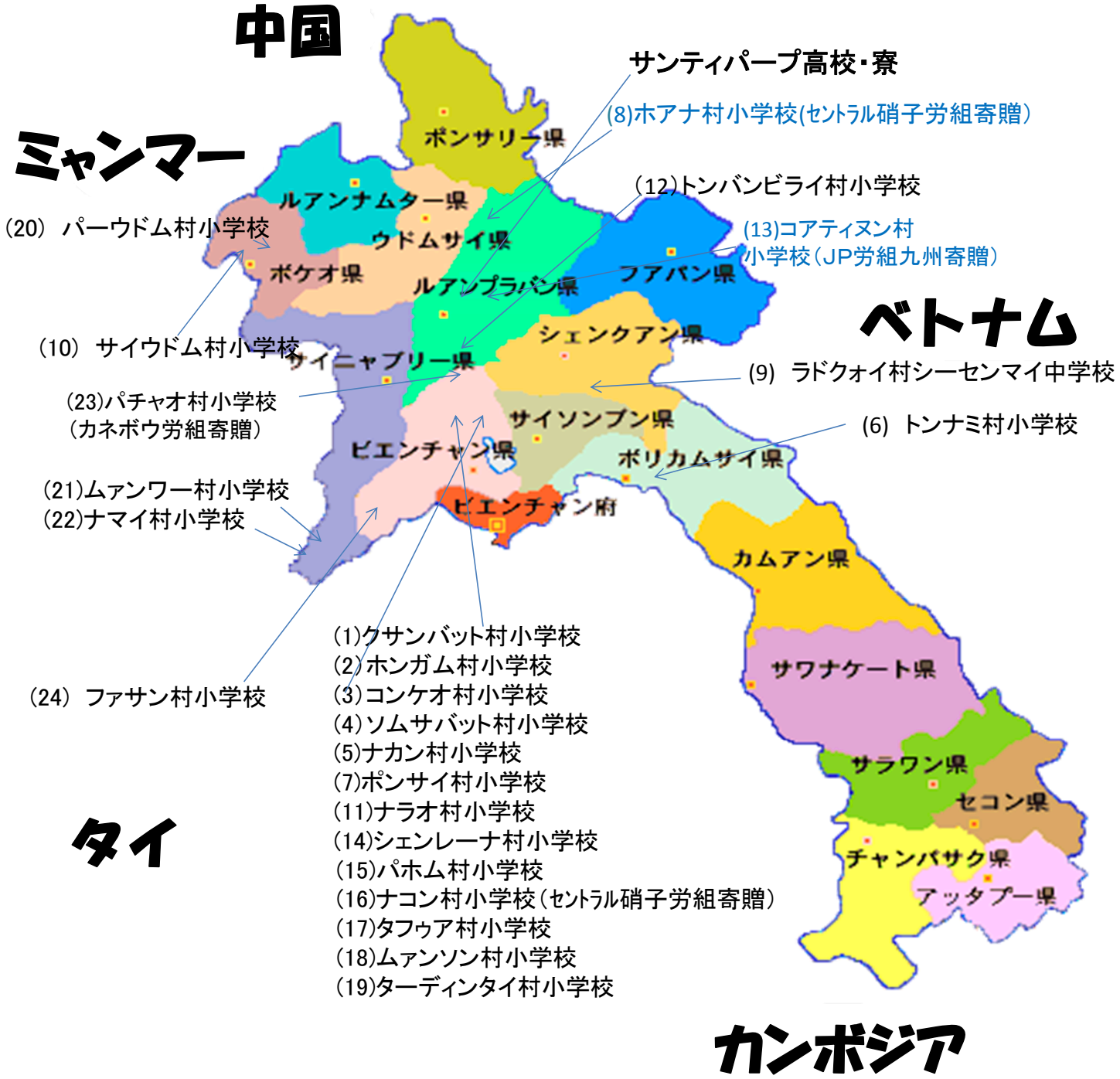
タイ・ウドンタニでの昼食会



高校生寮でのお迎え

はい　ポーズ！

ラオスにおけるアジア連帯委員会
教育事業　ー　小学校建設地



2019年3月現在